

中国医学と道教(Ⅸ) 薬枕、神枕)

吉元 昭治

薬枕、あるいは、神枕といわれているものは、いわゆる中薬を枕に入れて眠ると、その薬効により安眠ができ、また治療保健作用があるとされるもので、民間療法的なものであるが、その歴史も古く、『道教経典』にも記されているので、今回はこの点について発表することにした。

最近、我が国でも、「安眠枕」として発売（中国より輸入）されている。その上段に緑豆皮、下段に合歡花、黄芩、竜骨、酸棗仁、芍薬、珍珠母が含まれ、その薬効が期待される。

伝えられるところでは、華佗は皮囊の中に、麝香、檀香、丁香等を入れ、室にかかげ、慢性的な呼吸器疾患に効があったという。その他、決明子や菊花を入れ薬枕としたとも『肘后方』などに記されている。

河北省、邯鄲布では、華佗薬枕の流れをくみ、陶製の「降圧枕」「菊花明月枕」「幼児保健枕」などがつくられている。

上海中医学院の指導でつくられた「延年神枕」は、漢朝皇帝が泰山を巡ったとき、百歳ばかりの老人からおくられた延年長寿の働きがあるという伝説的な神枕が、歴代宮廷秘方として伝えられたものをもととして製造したというものである。神枕に内包されている薬物は三〇種にもものほり、党参、当帰、川芎、菊花、防風等があり、頭痛、頭暈、耳鳴、頸筋痛、関節痛、喘息、肝疾患、不眠、神経衰弱、高血圧、動脈硬化症、心臓疾患、肺気腫、慢性鼻炎等に効果があり、副作用もないとされている。

つぎに、『道教経典』のなかから、これに関した部分をひろい、総会において述べることにする。

『至言總』『洞玄靈宝道学科儀下』『上清明鑑要經』『雲笈七籤、卷四十八、秘要諸法』に、「神枕」「神枕品」「神仙除百病枕藥方」「神枕法」の名で出てくる。

これらの枕をつくるには一定の製造法があり、中に入れる薬草も二十四味があつて、これは二十四氣に応じ、さら

に八種の八毒薬を加えるが、これは八風に応じるとされている。これらの薬物名や分析は発表の際に述べることにする。現在、使用されている薬枕もその歴史は古く、道教とも関係していることがわかる。

(順天堂大学産婦人科)

湯爾和と北京医学専門学校

寺 畑 喜 朔

一九一三年(中華民国二年)支那国民による国立北京医学専門学校が設立された。創立の沿革は「本校の萌芽とも亦支那国民に依る医育の濫觴とも見るべき清光緒二十九年三月京師大学堂が後門内大平街の民房を借りて医学実業館を置き、練習生数十人を選んで、西洋医学を教授したことで、翌三十年には前門外八角琉璃井に三棟の家屋を建築して医学館と改称したのである。是より先き光緒二十八年に於て孝欽皇后が内帑金を以て後孫公園に細民救療のために施医総局を建てたが、後之を医学館に与へた。斯して清国は民国となって、共和政を布くに至ったが、其の元年に教育部では医育を重要視し、同部自ら医学専門学校を設立することになり之を原価で買収したが、之が現在の北京医学専門学校である。而して同年九月には愈々浙江省人湯爾和氏が迎へられて、開校事務に当り、二年一月第一回の入学